〔駒沢女子大学　研究紀要　第10号　P．7～16　2003〕

スロービューティー宣言
―― 次世代の美的価値を求める試論 ――

石　田　かおり

The declaration of "The Slow Beauty"
―― An essay on the beauty value in the next stage ――

Kaori ISHIDA

In last two papers we tried to clarify the fact that health and beauty are inseparable, and that this fact is the result of the modernization and the westernization at the Meiji Restoration, which had brought us not only the modern western way of thinking but also the modern principle of social structure and also new moral and new beauty value. In this paper we try to think the issue concretely and radically, which way we should choice about the beauty value in the next stage, recommending to find the way to solve the problems about the beauty of our body. We introduce the alternative value standard, which called "The Slow Beauty". We declare in this paper "The Slow Beauty".

序

われわれの身体の美にとって健康が分かちがたく結びついている現状と、その来歴について、以前の２つの論考で明らかにした。(注１)それらでは、わが国においては明治維新に始まる西洋近代の思考法とそれに基づく社会構造原理、そして道徳的・美的価値観に、今日の身体をめぐる美的状況の原点があることを明らかにした。本論では、これらの論考を踏まえた上で、先の論考に指摘した今後の価値のあり方を具体的・根源的に考えることを試みる。それは同時に、先の論考で指摘した現在の身体の美に関する諸問題に対処する方向性を見出すことも視野に入れてのことだ。

１．近代の呪縛

（１）　富国強兵に始まる美的価値基準

まず始めに先の論考で明らかになったことの概要を述べておこう。

美と健康が強固に結びついたのは、明治維新の「富国強兵」政策に端を発する。経済大国と軍事大国を実現し、当時の列強諸国と肩を並べる国家になろうという目的から、さまざまな健康政策が国民に対して取られた。その根拠として、当時、西洋から輸入された自然科学的思考法が利用された。それは「近代的」な、当時としてはもっとも価値の高いものとして、人々に受け入れられた。また、「富国強兵」という考え方は、西洋化と近代化を同時に推進するものである。それゆえ、近代合理主義に基づく自然科

学的思考法は、人々に信仰に近い支持を得られたのも当然であっただけでなく、政府の立場から見てもまさに「理に適った」事態であったと言えよう。

さて、西洋化・近代化は少しずつではあるが、確実に、国民の生活に浸透して行った。それは美容においても例外ではなかった。美容にまつわる言説が、たとえ表面的なものであっても、西洋近代科学を根拠にしたものに変化しただけでなく、美容法や化粧品の処方など、具体的な行動や物にも同様の変化が訪れた。それと同時に、「健康は美への第一歩」という考え方も広まって行った。そこには衛生思想の導入が大きな役割を果たした。また、鎖国が終わり西洋人と接した当時の日本人の一般通念として、西洋人は体格的・美的に優れた身体を持っているのに対して、日本人は劣っているという身体観を持つようになったことも、美と健康の結びつきを大きく推進するものであった。

その後今日に至るまで、幾度も繰り返されてきた健康ブームと、近年ますます高まっている美容に対する熱意と行動のエスカレートは、ここでは具体例を挙げることは省略する。

現代日本人の身体に関する、とくに女性の身体に関する美的価値基準は、明治維新の国家政策に相当程度の影響を受けている。維新以来百年余り、国家や社会の体裁だけでなく、生活様式も、身体も、西洋を手本にして西洋化を進めてきた。西洋やアメリカに対する憧れとその裏返しの劣等感に裏打ちされて、これらのことが進んできた。ここ10年ほどは、太平洋戦争後に生まれた親を持つ若者たちの出現もあって、若い世代に欧米に対する一辺倒の憧れや劣等感がなくなり（それと同時にアジア各国に対する差別的優越感もなくなり）、ありのままの姿で海外に接することのできる人が急速に増えてきた。ファッションの流行も、欧米にならうものや、欧米に進出して評価されて初めて一人前という意識が薄れ、国内に手本があり、国内だけで通用するものでよいという意識も高まってきた。身体に関する美的価値基準も、欧米を意識したものではなく、日本人の間でしか通用しない美意識を実現する方向も出てきている。まだ予断は許さないが、これまでは身体の美的価値に近代の呪縛が働いていたのが、違う方向に向かい始めていると見ることができるかもしれない。

（2） 美しさにとって不可欠な若さ

しかし、そうは言っても、身体の美的価値判断に、現実には近代的価値観の影響力は絶大である。その証左として、美と若さの結びつきの根強さと、近年それがますます強まっていることが挙げられる。

美容における抗老化は、「不老不死」という形で古来薬物が求められ、さまざまな行為が行われてきた。西洋の自然科学の処方に基づいた抗老化化粧品（注２）は1930年代から存在してはいたが、本格的な抗老化化粧品が登場するのは1980年代を待たねばならない。スキンケア化粧品においてシワやシミといった老化現象を対象にしたものが続々と登場した時代だ。この背景には、1960年代を中心に国内の主要化粧品メーカーが相次いで科学研究所を設立・改変し、本格的に科学研究を始め、その成果を化粧品の処方にいかし始めたことが挙げられる。これが第一次抗老化化粧品の時代である。次いで抗老化化粧品が目覚しい発展と普及を遂げるのは1990年代のことだ。90年代は化粧品業界では「機能戦争」と呼ばれる時代で、化粧品の成分による機能を競った時代であった。これが第二次抗老化化粧品の時代。そして、近く第三次抗老化美容の時代を迎える兆しがある。こんどは化粧品だけでなく、美容外科と組み合わせて抗老化美容を進めると予想される。エステティックサロ

ンの広告の変化がこのことをもっともよく物語っている。90年代に入って急激に業界が伸びたエステティックサロンだが、当初は痩身・脱毛を主たる目的とした宣伝を展開していた。90年代後半になり、「癒し」という語が登場し時代を象徴する流行語になった頃、痩身・脱毛と並んでリラクセーションも主要な宣伝項目に加わった。そして2001年頃から、痩身は相変わらず主要な項目を保ち続けているが、それと並んでシワやシミを取るといった抗老化が、主要な項目として登場してきた。それに伴ってサロンが想定している顧客層の年齢も上がった。

化粧品における抗老化の技術開発は今後ますます競争が激化し、抗老化を目的としたサプリメント（栄養補助食品）の市場が今後ますます拡大し、抗老化を目的とした美容外科手術の受け手も今後ますます増加することが予想される。抗老化の技術がこれほど身近になり、だれもが日常生活に自然に取り入れられる時代を私たちは史上初めて迎えたが、こうした社会的背景は身体の美にとって若さの重要性をますます増長させる方向に、今までのところ、働いている。

では、なぜ若さが美の重要な要件であることが近代の呪縛であるのか。それは、近代の価値観である合理主義に基づいた社会の設計基準が、近代型の勤労できる身体にあるからだ。「富国強兵」という考え方によれば、「富国」すなわち国家の産業を支える働き手は若くて健康な勤労できる青年・成年男性であり、「強兵」すなわち軍事力を支える兵士もまた若くて健康な勤労できる青年・成年男性である。社会における性別役割分担を導入した明治政府（太平洋戦争までの政府）にとっては、女性には勤労男性を支える役割を与えていたので、社会設計の基準は勤労男性といえる。やがて、太平洋戦争後の憲法改正とそれに基づく男女平等社会への動きによって、勤労できる身体は男性だけのものから女性にも広まった。が、性別はどうであれ、勤労できるということは、若くて健康ということであり、当初から若さと健康とが分かちがたく結びついていることに変わりはない。こうして若さと健康には、道徳的な価値も加わって、美的価値と結びついてきた。

事実としては、身体の美、とくに女性の身体の美にとって若さが台頭したのは20世紀に入ってからだ。産業革命に始まる近代の科学技術がさらに大きく進展した1920年代から30年代にかけて、モータリゼーションや高速列車の登場による「スピード時代」と呼ばれた技術開発が起こった。それと同じ時代、女性のファッションにおいては、初めてコルセットから開放されたが、代わって登場した流行の身体は未成熟で少年のような身体だった。女性独特の体の曲線や母性を想起させるような凹凸のない、スレンダーな身体。その身体の様子がよく見えるように、袖なしでスカート丈も史上初の短さだった。(注3）こうした体型の持ち主で、こうした服が似合うのはごく若い女性しかありえない。事実、それまでのモードの担い手やファッションリーダーは上流階級の中年夫人であったのに対して、この時代のファッション画に描かれ人々の購買意欲をそそるモデルの女性は、これまでのファッションリーダーの娘の世代、10代後半から20代前半になった。これ以降、理想体型は変化するものの、「若くなければ流行のファッションが似合わない」ことは現在まで変わりなく、また、ファッションを制作・販売する側も、現在まで流行は若い人が中心であるという意識でいる。

20世紀はダイエットと若いことが美しい身体のための必要条件であるという意識と、健康、ファッション、これら3つの項目の結びつきが強固になって行く歴史ということができる。そして、21世紀を迎えた現在もまだ美的価値観に

おいては20世紀をそのまま引き継いでいる。現在最強の美的価値観は「若さ＝美しさ」であり、近年ますますこの傾向は強まっている。ファッションリーダーであり、女性がめざす身体美を実現しているアイドルタレントの年齢は、アイドルタレントが登場した1970年代には10代後半から20代前半であったのが、現在は10代の始めの小学生にまで低下している。マスコミにもてはやされる女性の年齢も近年急速に低下して、「ヤングミセス」から「女子大生」を経て、現在は「女子高生」がもっとも注目を浴びている。さらに、最近は女子中学生のファッションが情報誌・服の販売ともに盛んになっているので、近く「女子中学生」にシフトするかもしれない。また、女子スポーツの分野で美を競う種目であるフィギュアスケートや種々の体操競技を見ると、子供選手権と錯覚を覚えるほど選手の年齢の著しい低下が見られる。かつては子供服と大人のファッションは別の流行であったのが、現在は完全に一体化している。いまや、中学生だけでなく小学生の間にもメーキャップやヘアカラー、ネールエナメルが急速に拡がって、身体の美的表現形に大人と子供の境界がなくなっている。一方では、中高年と呼ばれる世代には、化粧品やエステティック、美容外科などによる若返りが盛んに行われている。

若さ＝美しさという価値観に基づく美容行動は近年ますます活発になり、若さ＝美しさを固く信じて疑わない人も増えている。(注４)近代の呪縛はまだ続いていると言えよう。

２．人それぞれ・年それぞれの美しさ

こうした事態に対して、先述の論考では、発想の転換と新たな価値基準の提案をした。それが「人それぞれ・年それぞれの美しさ」である。

若さの美を求めて人々が次々に得る情報に右往左往することは、美の基準が個々人に外在化しているためである。若さの美の場合には、その時代に合致した若さの年代にある者にとっては美的基準が外在化しているわけではないが、それ以外の世代にとっては外在化している。また、その時代の美に合致した年代の者であっても、多くの人は美的基準が当人に内在化しているわけではない。その年代にある者も、そうでない者も、身体の美的表現形のモデル（手本）に自分自身を比較して、モデルに少しでも近づこうとさまざまな努力をするのが現実である。モデルはいつの時代も社会の中にごく少数しか存在しない。大多数の一般人はモデルに比して欠点を抱えた者として自分の身体を位置づけている。こうした事態は、美的価値基準が個人に外在化しているゆえである。

さて、新たに提案した発想では、まず最初に、美的価値基準を個々人に内在化させることから始める。これが「人それぞれの美しさ」である。従って、「人それぞれの美しさ」とは、社会における美的価値基準の多様化である。

次いで、個人内部での美的価値基準の多様化を図る提案をした。昨年の今時分の季節の自分と、現在の自分とを比較したときに、美的表現形の上でもっとも価値の高い状態は違ったものである。これにはたしかに、流行の変化という理由もあるが、それだけではない。自分自身が加齢によって外面的・内面的に変化したことも理由として考えられる。またさらに、来年の同じ時分の自分とも比較すると、来年はまた違った表現形がもっとも美的価値の高い状態と考えられる。これは、10年前、現在、10年後と３つの年代の自分で考えたときにも同様である。そして、たとえば10年前、現在、10年後の３つの自分を比較して、どれも違った美があってどれが美的価値が最も高いかを問うのはナンセンスである、そうした年の重ね方ができれば理想的ではないか。これが「年それぞれの美しさ」で

ある。(注５)

このように、「人それぞれ・年それぞれの美しさ」という標語で、身体の美的価値基準について、社会内部での多様化と個人内部での多様化を図ることを、先の論考では提案した。この考え方に基づいて、その後の社会動向も考慮に入れながら、さらに論考を進めたいと思う。

３．スロービューティー

（１） ファストな社会からスローな社会へ

21世紀を迎えて１年近く経った頃から「スロー」という語が次の生活様式として急浮上し始めた。たとえば農業と食生活では「スローフード」、生活様式全般は「スローライフ」というように。「スロー」(slow) は20世紀を通じて人々が争って求めた「ファスト」(fast) の反意語である。

「ファストフード」が大量に生産され、それを消費する「ファストライフ」の時代には、何事も効率化し、だれがどこで行っても同じ行為をする限り同じ結果になることが求められ、そのための技術開発が盛んに行われた。大量生産・大量消費の時代を可能にした技術開発である。「速いこと」・「簡単なこと」・「便利なこと」・「均一なこと」は道徳的だけでなく美的にも高い価値を持っていた。これは、近代に始まり、近代を受け継いだ現代も働いている社会原理と同じである。効率化とは、近代の根幹に存する合理主義が求める至上価値であるからだ。労働力も時間も何もかもすべて「コスト」として定量化・数値化して、もっとも低いコストが最善であるという価値観が「ファスト」の社会である。

それに対して「スロー」の社会では、効率化は最善の価値ではない。だれが行うか、どこで行うかで違った結果が出るように、人的特性や地域的特性、目的を達成するまでの過程の経験といった、きわめて個別的で一般化不可能な価値を最重視する。その結果、効率性がそがれてもかまわないという考え方だ。その土地で採れたそば粉をその土地の湧き水を利用してその土地の職人がその人独特の方法で打った蕎麦を、わざわざ遠くのその土地に出かけて食べに行く。その体験はほかのどこでも味わえないもので、しかも、季節によって体験が違うし、体験する側の条件も考慮に入れれば、すべてが1回限りの体験である。これがスローな社会での行動の一例だ。唯一性を重んじる、いわば「一期一会の社会」、それがスローな社会である。

そもそも人が年を重ねていくことは1回きりの出来事である。人格の唯一性も考え併せるなら、人間の生の営みは本来スローである。その個人性をできるだけ消し去って、効率よくすることで文明の恩恵を広く人々に分かつことをもっとも重視したのが近代原理であり、近代原理に基づく社会であったがゆえに、20世紀は世界の広範囲の人々が近代原理に基づく技術文明の恩恵に与り、生活水準が急激に向上した。この近代原理の実績を否定する意図は筆者にはまったくない。しかし、ここに来て、近代原理に基づく技術文明の恩恵にもっともよく与った国々でスローな社会を求める動きが出てきているのは、単なる物好きの趣味では語りきれないのではないか。スローな社会を求める動きは、近代原理一辺倒の社会原理と価値観に由来する窮屈さや、もろもろの社会構造の破綻が発端であるからだ。

スローな社会は決して近代原理に基づく技術文明を捨て去る社会ではない。近代技術をさらに推し進めて役に立つ技術を大いに活用しながらも、近代原理だけでは運営しない社会である。たとえば、環境問題の発端には近代技術開発が存するが、環境問題の根幹には、効率を至上として他を配慮しないという近代原理が存する。

現在の環境対策を見ると、近代技術を高度に推し進めた技術が環境問題を軽減すると同時に人間の生活環境にもよい結果が得られるものになっている。

(2) スロービューティー宣言

スローな社会は個人が抑圧された過去の封建的な社会原理に戻るのではなく、個人の個性の発露をできるだけ妨げない、むしろ助けることをめざす社会である。「人それぞれ・年それぞれの美しさ」を考えた場合、この美しさの考え方とスローな社会の構成原理における考え方は共通するところが多い。また、この美しさを実現する場合を考えると、スローな社会は大いに期待の持てる社会である。

したがって、スローな社会における「人それぞれ・年それぞれの美しさ」を求めることが、美容がめざす美的価値基準であると考えられる。その美的価値基準を「スロービューティー」と名づける。そして、これからの美容のあるべき方向として、「スロービューティー」をめざすことを提言し、本論を「スロービュイーティー宣言」にもって代えたいと思う。

「人それぞれの美しさ」は、きわめて個人性の高い、すなわち個別性の高い美である。これはスロービューティーにふさわしい美である。また、「年それぞれの美しさ」は、その年・その年にしかない自分自身の美であるが、それを積み重ねて行きながら歳月が流れた結果を考えてみよう。毎日毎日の、1年1年の積み重ねでしか得られない美しさがその結果である。これもスロービューティーである。きわめて個性的であるだけでなく、どんな日々を、年月を重ねてきたかで、結果が変化する美であるからだ。

スロービューティーは、単にスローな社会における「人それぞれ・年それぞれの美しさ」を実現する方向での美容というだけではない。スローな社会における実現なので、ここには自ずと実現方法、すなわち美容法や、一定の美容法の下で使用される化粧品の性質も含まれてくる。それは、現在化粧品に強く求められ、化粧品では飽き足らなくなって美容外科に行くような、即効性とは正反対の化粧品と美容法である。そもそも化粧品は「薬事法」という通称で呼ばれる法律によってその性質が定められているので、即効性には限界がある。(注6)こうしたことから、元来化粧品を使った美容はスロービューティーに適している。

4. 美しさと快適さをめぐる問題

スロービューティーを身体において実現する具体的な場面を考えたときに、近現代社会がなおざりにしてきた美を獲得する技術が再び重要になってくることが考えられる。それは、躾による礼儀作法教育であり、型を用いた教育技術である。なぜ躾や型が重要になるのか。その理由の説明を、わが国における身体の美的表現形として現在問題となって浮上している事実を再認識することから始めよう。

まず始めに、具体的な例として、筆者の授業での出来事を述べよう。筆者の授業全体は「〈きれい〉を学問する」というコンセプトを掲げ(注7)、その下にいくつかの授業形態による授業を位置づけている。ここで言う「きれい」とは身体における美的表現形のことである。講義・グループ学習・演習・講義と実習を組み合わせたもの、という授業形態をとっているが、この中で講義と実習を組み合わせた授業での出来事を紹介したい。この授業は筆者が受講者1人1人を個人的に指導できる少人数制で進めている(注8)。和服着用時の「きれい」について、知識を身に付けることと体を動かすことによる体感も経験することで、日常経験している洋服着用時の「きれい」との共通点・相違点を考える

ものである。自らの身体をもって「きれい」を表現する試みをするのだから、受講者は筆者の授業の中でももっとも「きれい」を自覚する機会の多いものと考えられる。

ある授業中、浴衣を着用した状態で机に向かって文字を書いていたときに(注9)、大きく両足を広げ、片足の膝下全体を延ばした結果大幅に机から前に足を出した状態で坐っている学生がいた。筆者が授業の目的とコンセプトのことをその学生に確認して、今の自分の姿勢がそれに合致しているかと問うことで注意を促そうとしたところ、学生は次のように答えた、「この方が楽だからいいんです」。これは、その学生にとっては授業で「きれい」を体現することより自分自身が楽であること（快適性）の方が優先されているということだ。

また、同じ授業で同じく浴衣を着用していたときのこと。動作実習をするときには、動作の都合上足袋を穿くように指導している。また、足袋を忘れた場合には靴下を脱いで裸足になるように指導している。実習を始めようとして全員が揃って所定の位置に立ち、挨拶を始めようとしたまさにそのとき、自分が足袋を忘れたのに靴下を穿いたままであることに気づいた学生がいた。そこで、靴下を脱ぎ、脱いだ靴下を自分の荷物の中に入れるときに、立っているその場から4～5メートル離れた自分の鞄をめがけて丸めた靴下を投げた。この学生の場合も上記の例と同じく、授業の目的（美の体現）よりも自分自身の便宜（快適性）を重んじた行動と言えよう。

美を意識した行動よりも自分自身の快適性を重んじた行動をしてしまうことは、何も筆者の所属する大学の学生の間にだけみられることではない。電車内などの公共の場でメーキャップをすることが一時社会問題になったが、それも同じ行動原理である。それだけではない。近年では大人も高齢者もどの世代にも、やせ我慢をして美的価値を求めるよりも快適さや利便性を優先する傾向が見られる。こうした行動のすべてが問題であるわけではないが、中には目に余る醜態に至るものも現実に存在し、しかも年齢が下がるほど目に余る行動が目立つように思われる。化粧文化研究者の村澤は「見ず知らずの人にどう自分を見せるかをまったく知らない世代が増えている」と述べている。(注10)

他者から自分がどう見られているかよりも自分自身の快適性を優先することは、いわば自分本位な発想であるばかりでなく、場合によっては他者を無視し、公共性を無視することにもなる。電車内化粧が問題にされる原理はまさにここにあって、乗り合わせた者を無視し公共性を無視することが不道徳であると直感的に感じられるからだ。さらに、公共性を無視していることを知りながら意図的に自分本位な行動をする場合と、先述の村澤が指摘する、教育を受けていない結果自分本位な行動をしているかどうかすら判断できずに実行する場合と、2種類の場合が存在し、ある一定の年齢以下の者には教育を受けていない結果の行動が目立つ。そこで、この章の始めに述べた、美を獲得する技術としての、躾による礼儀作法教育と、型を用いた教育技術の重要性が浮上する。

5．美的身体を実現する教育―躾による型の体得と価値の伝承

かつて家庭教育において最重視されたものが躾であった。社会生活を送る上で最低限のルールを身に付けて、社会において一人前の人間として取り扱われ、共同体の中で生活のできる人物になることが目的とされていた。躾は当人の意思よりも公共性を重んじる発想である。また、躾は理論ではなく実践の教育である。道徳的・美的価値基準に適った行動を大人が自らの身体

をもって手本を示し、あるいは子供の行動を注意することで行われるものである。こうして身体技法が習慣として身に付く。

躾にとって重要なのが型である。茶碗の持ち方、箸の持ち方、他人の家に上がるときの履物の置き方、挨拶の仕方などの一定の身体技法が型である。型は社会に共有されている道徳的・美的価値基準を具体的な形態にした表現形である。型があると、何を教育すればよいかだれにとっても明確である。型があると、自分自身の行動が価値基準に合致しているかどうか判断することが、だれにとっても容易である。型に合致していれば、その社会においては自分の行動がだれにも非難されることなく快適に過ごすことができる、ということが保障されている。型は美的価値基準の伝承と、価値基準に合致した身体の表現形を実現する方法として優れたものであると考えられる。

近代に入っても、型も躾もしっかりした存在であったが、太平洋戦争後の現代になると、型や躾は個人の自由を束縛し「封建的」であるとされ、非難の対象になり、次第に軽視されるようになった。またそれと同時に、躾という教育を担っていたのは学校もあるが、主として家庭と地域社会であったが、太平洋戦争後は地域社会における共同体の崩壊が進み、個人における共同体の成員としての自覚が次第に薄れ、共同体が躾を担うことができなくなった。その上、家庭においてもあまり躾を受けずに育った世代が親になり、次の世代にさらに躾をしなくなるという状況が目立ち始めている。こうした事態が進行し、型を教える躾と同時にその根幹にある道徳的・美的価値基準の伝承も消滅しつつあり、村澤の指摘する事態が若い世代に目立つようになった。

このようなわけで、型を用いた躾という教育の利点をいかすことが、身体における美的価値基準の表現形を獲得することにとって適した方法であると考えられる。

この章のさいごに、スロービューティーと型を用いた躾との関係について述べよう。

スロービューティーは即効性を求めずに、日々の積み重ねを重視した美的表現形である。毎日の努力、何かをするたびに意識や配慮をすることの積み重ね、こうしたことで実現する美である。型の獲得という躾はまさにこれらに合致する。

人の美しさには品性が不可欠であると考えられる。品性を獲得するためには、最低限の条件として反社会的・不道徳な行為が排除される。しかしそれだけはあまりにも不十分である。さらに、品性にとっては、己の行動が他の模範になることが求められるのではないか。このときに躾が効果を発揮する。

人は1人で生きているわけではない。社会の成員として他者から認められると同時にそのことを自負できるためにも、躾は重要な役割を担っていると考えられる。

6．日常生活においていますぐできる行動の提案

若者の美的価値基準が狭い範囲に収斂し、年齢が下がるほど収斂の度合いが強くなる傾向は、もとをたどればアイドルタレントが出現した1970年代に始まると考えられる。しかし、加速度的に状況が進行したのは1990年代後半以降に見える。その背景には、高度情報化社会の進展（具体的にはインターネットの家庭普及やモバイルの個人普及）や、消費社会に当事者として巻き込まれる年齢が急激に低下を始め、子供にまで至ったことなどが考えられる。しかしそれだけではない。子供や青少年が自分自身のあり方を思い描くときに、職業という意味ではなく、

生き方やたたずまい、人柄、身体の外見的な状況など、人のあり方として、手本や、あるいは自分自身の2～3年後、10年後、大人になったときの将来のモデルを見つけることが困難になったからではないか。

かつては大人の生きる社会と子供の生きる社会との間の壁が明確で、大人にならなければできないことや知ることのできないことが、少なからず存在した。ところがこの壁の存在自体が今や疑問視されるほど、両者の生活する世界に差異がみられなくなっている。差異の明確な時代には「早く大人になりたい」というのが子供や青少年世代に共通に見られる意識であったが、現在では「大人になると責任が増えるばかりで何もメリットがないから損だ、子供のうちは同じことができても責任が伴わないから得だ」という意識が蔓延している。こうした事態は、地域共同体の機能衰退と共同体意識の消滅と同時に進行している。躾をする役割を個人の家庭のみならず共同体が相当な部分を担っていた時代は、すなわち共同体の機能が十全であり、共同体意識も明確であった時代だ。子供や青少年はさまざまな生き方をする大人に接することで、将来の自分の職業だけでなく、多様な美的価値基準も自然に学んで行った。また、大人の方では子供や青少年に自信を持って道徳的・美的手本を示すことができた。しかし、大人と子供の境目が曖昧な時代では、「大人はこうしたことができる」、「将来こんな大人になりなさい」、と手本を示すこと自体が構造的に困難である。

抜本的解決策は社会構造を変えること、それ以上に、大人も子供もあらゆる世代の人間の意識が変わることで行動を変えることであるが、きわめて大掛かりで困難であるので、一挙に進めることはできない。そこで、いますぐにできることから始めることを提案したい。

大人（高齢者も含む）は下の世代に美的に憧れられるような手本を日々の行動の中で示すよう心掛ける。青少年や子供にも、その下の世代がいる。年代を問わず、下の世代に美的に憧れられるような手本を日々の行動の中で示し続けること、それがいま我々にできることであり、求められていることではないだろうか。21世紀は「関係性の時代」とも言われる。人と人との関係性を美的価値に採り込めば、他者への配慮が美には不可欠であるということになる。

「美的」と言っても、それは「人それぞれ・年それぞれの美しさ」である。近現代の若さと健康の美だけが美しさではない。たとえば40代の母親が中高生の娘の手本になろうとダイエットに励んでファッションモデルのような体型になって流行の先端の服や化粧をしてみせることではない。たとえば、立ち居振る舞い・言葉遣いに今より少し配慮して、自分らしい美的表現をすることなら、だれでもできることではないだろうか。年上の人に憧れの対象がみつかれば、「大人になるのは損だ」という発想をする人も少なくなるばかりでなく、年をとると美的価値が激減するという発想、すなわち若さが美の絶対的な条件であるという価値観も弱まって行くことが考えられる。

そして、日々の小さな行動の積み重ねが年月を経たときに一定の効果をもたらし、その結果、自他ともに認められる美を獲得していたとすれば、それはまさにスロービューティーである。

注

1）2つの論文とは、石田かおり「健康美の時代――美と健康の結びつきから見た日本近現代美容史」,『研究紀要おいでるみん　日本の化粧文化』,資生堂企業資料館,2002年12月と、石田かおり「近現代日本の美容における眼差しの力」,『研究紀要第10号』,駒沢女子大学,2003年2月のことである。

2）「抗老化」は一般には「アンチエイジング」と呼ばれている。しかし、本来「エイジング」(aging) とは年月を経てよい味わいに熟成するワインのように、年月を経ることで価値が高まることを意味している。日本に「エイジング」という語が導入された当初は英語での意味に従っていた。したがって、「アンチエイジング」とは年月を経て高まる価値をわざわざ否定することであるから、価値を下方に向かわせる意味になり、本来好ましくなく、追求されるべきものであるはずがない。こうした、語のいわば「誤用」は、「エイジング」が単なる「老化」(senescence,「老衰」とも訳される、すなわち年月を経ると価値が下がる）と混同されているために生じたと考えられる。近年化粧品メーカーの中には「老化」と「エイジング」は別物であると強調する向きもあるが、今のところ「エイジング」=「老化」という語用が一般的である。

3）現在から見ればロングスカートで、ふくらはぎの下あたりの丈だが、それまでの歴史は女性のスカート丈は足が隠れるものであったので、画期的な短さと受け止められた。

4）2001年のある日、混んでいる電車の中で筆者のすぐ後ろで会話をしている3人の若者の言葉が耳に入ってきた。「卒業式が終わって、もう高校生でなくなった、もう人生お終いだなあ」という内容だった。マスコミにおいてもっとも価値の高く流通する年代が高校生であることを若者は敏感に感じ取っている。

5）ある会合で「人それぞれ・年それぞれの美しさ」について話したときに、聴衆の質問から「年それぞれの美しさ」を「年相応の美しさ」と取り違えていることが判明したことがある。「年相応」とは、年齢を根拠に美的表現形を抑圧する考え方であるが、「年それぞれ」はそれとは正反対の考え方であることを、もういちどここで注意しておく。

6）「薬事法」を引用すると、「人体に対する作用が緩和なものをいう」という一文が化粧品の性質をとくに規定している。

7）ここで言う「コンセプト」はマーケティングの術語である。このコンセプトはシラバスにも明記するだけでなく、セメスター毎の初回の授業でも説明している。

8）現実には30名が限度なので、30名の定員にしている。(理想を言えば20名以下が十分に指導が行きわたる)

9）教室の机なので椅子を使用している、正座ではない。また、筆者の所属する大学の性質も思い出してこの部分を読んでいただきたい。

10）村澤博人「エステ歳時記43」,『エステティーク』2003年7月号,日本エステティシャン協会

参考文献

橘川幸夫『暇つぶしの時代』,平凡社,2003年
清水義範『行儀よくしろ。』,筑摩書房,2003年
辻信一『スロー・イズ・ビューティフル』,平凡社,2001年
『化粧文化22』,ポーラ文化研究所,1990年5月
『ダイアテキスト08』,京都芸術センター,2003年1月
その他、「スローライフ」をテーマにした各種新聞記事やシンポジウムのパンフレット